



Title	一九四二年五月-八月 南方と文壇の「知的冒険者」
Author(s)	井原, あや
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 12-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【戦局】

▼5月

- ・日本軍がビルマのマンドレーを占領
- ・マニラ湾コレヒドール島の米軍が降伏

・珊瑚海海戦

- ・閣議、大政翼賛会改組を決定

▼6月

- ・ミッドウェー海戦。日本軍、空母四隻を失い、ミッドウェー作戦を中止
- ・キスカ島、アッツ島に上陸

▼7月

- ・大本営、ミッドウェーの敗戦により、南太平洋進攻作戦を中止

▼8月

- ・米海兵一個師団がソロモン群島のツラギ、ガダルカナルに上陸
- ・ガダルカナル島周辺海域で第一次・第二次ソロモン海戦
- ・ガダルカナル島奪回のため上陸した一本支隊がほぼ全滅する
- ・独軍、スターリンググラーブ攻撃

一九四二年五月―八月 南方と文壇の「知的冒険者」／井原あや

一九四二年の五月から八月という時間は、戦局においては、年明けから続いていた南方の島々における米英軍の降伏、そしてそれにかわるかたちで進められた日本軍による上陸・占領という構図が、六月のミッドウェー海戦の大敗によって立ち行かなくなり、南太平洋進攻作戦の中止を余儀なくされた時であった。そうした戦局に沿うように国内では金屬回收令によって寺院の仏具等の強制供出が始まり、現在の夏の甲子園（全国高校野球選手権大会）の前身、全国中等学校野球大会の中止も発表されるなど、先の見えない戦争に邁進していくのである。

このような戦局の様子は、文壇においても反映されていた。例えばこの時期、一九四一年一月に徴用され、翌年二月にシンガポールに入った井伏鱒二は、陸軍の宣伝班の一員として二カ月間『THE SHONAN TIMES』の編集責任者をつとめ、その後も「昭南市の大時計」（東京日日新聞）一九四二・六・二七）を発表、さらに「花の街」（東京日日新聞）「大阪毎日新聞」一九四二・八・一七（一〇・七）を連載していた（滝口明祥「占領下の『平和』、交錯する視線——『花の町』」「井伏鱒二と『ちぐはぐ』な近代——漂流するアクチュアリテイ」二〇一二・一一、新曜社）。もちろん、他にも多くの作家が徴用され、日本の野心の矛先となった南方を記述するものが目立つようになる。また、五月には日本文学報国会が結成され、文学者たちが「報国」のために組織化されていた。

そうしたなか、太宰治はこの時期、五月に「水仙」（改造）と小説集『老ハイデルベルヒ』（竹村書房）を発表、続く六月には中篇書き下ろし小説『正義と微笑』（錦城出版社）、ならびに女性一人称小説のみを集めた創作集『女性』（博文館）を出版、そして七月には『小さいアルバム』（新潮）を発表している。また、胸部疾患のため徴用免除となり、他の作家のように南方へ赴いて報告記や従軍記を記すことのなかった太宰は、右に挙げた創作活動の一方で、「六月末頃から、しばしば丙種点呼の召集を受け、突撃の練習、「勅諭」や

【社会】

▼5月

・金属回収令により寺院の仏具や梵鐘等、強制供出

・「大東亜建設に処する文教政策」を大東亜建設審議会が決定

▼6月

・郵便局で「彈丸切手」（割増金付切手債券）が発売される

・日銀が、タイ国大蔵省と二億円の借款供与に関する協定に調印

▼7月

・高等女学校の英語を随意科目とし、週三時間以内とすると文部省が通牒
・朝日新聞社が全国中等学校野球大会の中止を発表

・情報局が東京・大阪・名古屋・福岡地区の主要新聞統合案大綱を決定

▼8月

・「南方諸地域日本語教育並普及二閣スル件」を閣議決定

「軍人の心得」の勉強などをしたという（『太宰治の年譜』）。この「丙種点呼の召集」によって軍事教練に参加する自らの姿について、太宰は知人たちへの書簡の中で次のように記している（以下、書簡は全て『太宰治全集 第二巻』一九九九・四、筑摩書房より引用）。私は昨日から、またもや点呼の軍事教練で、突撃！ワアツ！などの稽古。けふも、これから出かけるのです。七月六日に点呼の本ものがあるのです。

（一九四二・六・二九、山岸外史宛）

私は明後日の点呼で、けふは勅諭や軍人の心得など勉強して居ります。ことしの九月には召集があるといふ話です。教練に参加して突撃の稽古など致しましたが、すぐに熱を出して本当に心細い兵隊であります。点呼が済んだら、十日ほど山の温泉へでも行つて静養して、それから、よい機会に四谷へ遊びに行かうかと考へて居ります。

（一九四二・七・四、竹村書房 竹村坦宛）

私は点呼や何かで、この夏は少しからだ工合ひをわるくして、これから、山へでも行つて少し静養して来るつもりです。（一九四二・八・七、博文館出版部 石光葆宛）

軍事教練に参加して「突撃！ワアツ！」と「突撃の稽古など」をすれば「すぐに熱を出して」しまい、「からだ工合ひをわるく」する姿は、ともすれば滑稽味を帯びて戯画化された姿にさえも見える。また、「点呼が済んだら」、「山の温泉へでも行つて静養して」など、病弱そうに見えてどこか暢気なところもあり、まさに本人の言う通り「心細い兵隊」ではない。しかしこの「心細い兵隊」は、ひとたび作家に戻れば、先述の通り毎月のように小説集を刊行し、雑誌にも小説を発表するという旺盛な書きぶりを見せていた。

こうした太宰の創作態度や小説は、当時いかに評価されていたのだろうか。ここで、上林暁による「水仙」の評と、内海伸平による『正義と微笑』の評を挙げてみたい。

現在、太宰治氏が目立つのは、彼が一種の冒険者であるからだ。「水仙」の面白さは、逆説の面白さで、菊池寛氏が「忠直卿行状記」で試みた逆説を、太宰氏はいもう一度ひ

【文化】

▼5月

・日本文学報国会設立（文芸家協会解散）

・佐藤春夫「図南の鵬 山田長政の一生」（週刊小国民）17日～8月9日

・上林暁「マレー作戦報告を読んで」（文藝）

▼6月

・徳富蘇峰を会長に日本文学報国会の発会式が行われる

・高見順「マンダレー入城」（現地報告）

・井伏鱒二「昭南市の大時計」（東京日日新聞）27日

・林芙美子「海軍兵学校訪問」（婦人朝日）

▼7月

・奥村喜和男「大東亜戦争と文学者の使命——日本文学報国会に寄す——」（新潮）

▼8月

・寒川光太郎「ボルネオ紀行」（新潮）

つくりかへしてゐるのだ。（略）そのやうな斬新な逆説が、常識として通用するやうになつたのは、菊池氏の功績だが、常識となるとともに、逆説としての力が喪はれてゐた。太宰氏は、その上にもう一つ斬新な逆説を樹てたのだ。（略）最近の氏の仕事には、心理的な、知的な冒険が企てられつつあるのを感じる。このやうな知的冒険者は、現在の文壇に、殆んど見当らぬと言つていい。

（上林暁「文学的冒険者（文芸時評）」「文藝」一九四二・六）

太宰をどんなふう論じてゆかうかと困り果てた所で、近作「正義と微笑」を読む。大変楽しく読んだ。それが何よりも私には嬉しかった。薄汚い身上漸で終始してゐる私小説。歴史小説とレツテルを貼つたおかげで動きのとれなくなつた客観小説。それやこれやでちつとも面白くなつた此の頃の小説。既に読む気はしない。そんな中では太宰の小説はともかく面白い。楽しい。若さがある。「正義と微笑」のよさも、その一点につきる。健康な青春文学と云へよう。而も之が近代文学の最後の青春文学になるのではないかと思ふ。淋しい話である。

（内海伸平「太宰治論」「赤門文学」一九四二・九）

「このやうな知的冒険者は、現在の文壇に、殆んど見当らぬ」と称賛する上林と、「ちつとも面白くなつた此の頃の小説」の中で「太宰の小説はともかく面白い」と評価する内海。いずれの評も、当時の文壇にあつていかに太宰が特異な存在であつたかを示す証である。

戦時下の太宰について紅野謙介は、「賛成するにせよ、反対するにせよ、きまじめに戦争に向き合わなければならないという至上命題を、太宰治は斜めに見ていた」（『太平洋戦争前後の時代——戦中から占領期への連続と非連続』、コレクシヨン戦争と文学別巻『戦争と文学』案内）と指摘しているが、自嘲するように「心細い兵隊」呼ぶ姿は、まさに戦争を「斜めに見ていた」ことになるだろう。もちろん、「京都帝国大学新聞」の依頼に応じて

【代表作】

▼5月

・太宰治『水仙』（改造）

・武者小路実篤『大東亜戦争私感』（河出書房）

・太宰治『老ハイデルベルヒ』（竹村書房）

▼6月

・太宰治『正義と微笑』（錦城出版社）

・太宰治『女性』（博文館）

・坂口安吾『真珠』（文藝）

▼7月

・岩田豊雄『海軍』（朝日新聞）1日

・12月24日

・太宰治『小さいアルバム』（新潮）

・中島敦『光と風と夢』（筑摩書房）

▼8月

・井伏鱒二『花の街』（東京日日新聞）

『大阪毎日新聞』17日～10月7日

執筆したものの、時局に相応しくないという理由で掲載不可となった「待つ」を創作集『女性』の末尾に入れ込んだ（『太宰治の年譜』）はいいが、「待つ」といふ題は、いよいよ、心配になりました。つまらぬ誤解を受けたくありませんので、どうか、題を「青春」と改めて下さいまし」（一九四二・三・二九、博文館出版部文芸課石光葆宛）と注意深く時局とも向き合おうとしてはいる（「待つ」については拙稿「太宰治「待つ」論——「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」「大妻国文」二〇〇三・三を参照）。しかし、先ほどの評から考える限り、当時の文壇が南方へのまなざしを強めるなかで、軍事教練ももとにも出来ない「心細い兵隊」は、「知的な冒険」を企てる「冒険者」としても評価されていたのだ。

そうした「冒険者」としての太宰の姿は、「花火」をめぐる一連の出来事にも見える。太宰はこの時期、八月一日頃から所謂「日大生殺し」と呼ばれた事件をもとに「花火」を執筆していた。この「花火」は、当初「八雲」のために執筆され「八月末頃に脱稿した」ようだが、「八雲」を編輯する加納正吉が「時局に相応しくない内容であることを憂慮して掲載を見合せ」（『太宰治の年譜』）、その後、「文藝」（一九四二・一〇）に掲載されるも、直後に削除を命じられた小説である。

「花火」は、戦時下不良の事を書いたものを発表するのだろうか、といふので削除になったのださうです。もちろんあの一作に限られた事で、作家の今後の活動は一向さしつかへないといふ事ださうで、まあ、私も悠然と仕事をつづけて行きます。（略）／今月の二十日頃までに、短篇などの仕事を全部片づけて、それから、いよいよ「実朝」にとりかかるつもり。（一九四二・一〇・一七、高梨一男宛）

削除を命じられても、「悠然と仕事をつづけて」行く決意。文壇の「知的冒険者」は、八月以降もさらに旺盛な創作欲を見せていく。それはまるで、『実朝』——『石大臣実朝』（一九四三・九、錦城出版社）に向けた新たな「冒険」でもあるかのように。